慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・ ヒックス著 経済史の理論
Sub Title	John Hicks, A theory of economic history
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1970
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.63, No.6 (1970. 6) ,p.522(104)- 525(107)
JaLC DOI	10.14991/001.19700601-0104
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700601-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョン・ヒックス著

『経済史の理論』

A Theory of Economic History. By John Hicks. (Clarendon Press, Oxford, 1969. Pp. vii, 181. Appendix, index. £1. 25p.)

この書物の広告を見たとき，著者が誰であるのか，一瞬戸惑いを感じた。『価値と資本』『景気循環論』そして『資本と成長』のヒックスと経済史とは，すぐには結び付かなかったからである。この疑問は序文を読んで氷解した。ヒックスは G. D. H. コールの下で学んだことがあり，ポスタンやアシュトンの友人であり，何と，アイリーン・パウアの講義ノートの助けを借りて「中世英国経済史」を講じたことすらあるという。ヒックスは経済史家にはならなかった——これは，われわれ経済史を学ぶ者にとっては少々残念なような気もするが，経済学界全体のためには幸運であったかもしれない——しかし，経済史に対する興味はずっと以前から抱いていたわけである。もっとも，彼がこの書物を書くに至ったのには，アシュトンとの交友が，とくに影響しているようである。ヒックスとアシュトンとは，マンチェスターにおいて親しい同僚であり，アシュトンの引退後も，ヒックスは彼を通じて経済史家達と交わり，彼と議論できるように，Economic History Review の購読を続けたという。そして，この書物で扱われた多くの事柄について，二人の間で議論が交されたという。

さて，ヒックスと経済史との結び付きは以上の如くであるが，『経済史の理論』は単にかかる個人的理由からのみ書かれたわけではない。専門化が進みすぎて，異なる学問分野の間での対話が困難になってしまっている現状と，そうした中で経済史が果すべき役割についてのヒックスの考え方こそが，この書物の根底となっている。彼の考えでは，経済史の主たる役割は，経済学者や政治学者，法律家，社会学者，そして歴史家（思想史や技術史をも含めての）が集まって，お互いに対話することのできる広場，すなわちフォーラムたることにある。そして，この書物は，そこでの会話に参加するためのもの，というわけである。

このようなヒックスの見方は，経済史を専攻する者にとっても，ほとんど異存はない。元来，経済史は経済学の一部門なのか，歴史学の一部門なのかすらはっきりしないし，それこそが経済史の特徴ともいい得る。経済活動がそれ自体として独立したのは，そう昔のことではないのであって，古代，中世においては経済と，政治や宗教との境界が，必ずしも明確ではない。（実際には，今日においてすら，経済と他の分野との完全な分離がおこなわれているわけではない。）研究の対象がそのようなものである以上，経済史は他の学問分野との交流なしには存立し得ぬのであって——もっとも，他の学問分野をすべて補助学として経済史の侍女扱いすることもあるが——ともかく，経済史に対するヒックスの見方は正鵠を射ている。

ところで，歴史の対象は，しばしば個別特殊的なものと考えられている。「歴史の理論」などというものが，はたして成立し得るであろうか。こうした疑問には，しかし，誤解があるのであって，歴史家にとって理論が全く無縁なわけではない。理論という言葉を使うか使わぬかはともかく，何らかの一般的規準なしには，史料の選択すら不可能となるからである。残っている問題は，かかる「理論」の必要性を，どの程度にまで拡大すべきかという点である。いいかえれば，個別的問題を解くための仮説程度にとどめるべきか，それとも，世界史の流れといった範囲にまで拡大すべきかということである。ヒックスは，この書物では，後者の立場をとるわけであるが，とはいえ，彼の考えている「歴史の理論」は，トインビーやシュペングラー流のものではなく，むしろマルクスの試みに近いものである。

ヒックスの経済史の理論は，したがって，マルクスや，歴史学派の発展段階説と著るしく異なっているわけではないが，それらに比べれば決定論的もしくは進化論的色合いは薄いのであって，それこそが相違点である。さて，マルクスの場合には「資本主義の発展」という概念が中心をなしていたが，ヒックスの場合には「市場」もしくは「交換経済」が中心概念である。「市場」は「資本主義」に先行し，しかも今日の経済理論からして，より基本的重要性を持つ，というのがヒックスの立場である。すなわち，序章と結論を含めて十章からなるこの書物で展開されるのは，市場の成立と拡大，それが人々の生活に与える影響についての，主として理論的な考察である。

最初の問題は，「市場の成立」であるから，議論はそれ以前の状態，すなわち非市場経済から始まらねばならない。かかる状態にある経済組織として，ヒックスは Customary Economy と Command Economy という二種類のモデルを示す。前者は，原始未開の社会に見られるような，すべてが慣習と伝統に基いて運行されているシステムであり，王や首長が存在したとしても，彼等自身，慣習の支配下にあるような組織である。ところで，そうした社会が，外敵の侵入であるとか，人口増大であるとか，何らかの危機に直面した場合には，一種の軍事独裁の如き，首長の指揮権あるいは統率権が極めて強大な組織に変化しやすい。危機が大きければ大きいほど，その可能性は大きいが，ともあれ，前者の組織とは正反対のシステムも考え得るわけであって，これが Command Economy である。以上二種のタイプは，「交換経済」と「中央計画経済」のアナロジーとして考えてもよいであろう。この間には，当然，中間的なタイプが存在するわけであって，とくに首長の指揮権は，一旦危機が去ると弱まりやすい。その際には当然，軍政を民政に移すといった手続きが必要なわけであり，その成功の度合によって，封建制や古典的官僚制といった社会組織が生じた。封建制は慣習的要素が強く，官僚制は首長による指揮統率の強いタイプである。

ところで，これらすべての非市場経済の特徴は，多分純粋に慣習的なタイプを別とすれば，生産に従事する者が特定の権威者に納める租税なり貢納なりを中心として，経済が運行していることであり，それ故に Revenue Economy と呼ぶことができる。これは市場の成立に先行しているが，もちろん市場の成立後も存続するのであり，今日みられるが如き，公共部門の比重の増大は，それへの回帰ともいえる。

さて，当面の問題は，上記の如き非市場経済の中に，いかにして市場が成立したか，ということである。非市場経済には，農民，兵士，役人，手工業者は存在しても，商人は存在しない。何らかの形態での偶発的な交換は生じたかもしれないが，商業を専門とする者はいないのであり，専門的な商人が出現することこそが，新しい時代の開幕をつげるものである。専業化した商人の出現する過程を，ヒックスは Customary Economy および Command Economy の両者について考察する。前者においては，祭礼等における物々交換から，祭礼が祭市という性格をおびるにいたり，そこに仲介商人が生れるというルートが考えられ，後者の場合には，例えば朝貢使の如き王の使者が遠隔地商人になってゆくルートが考え得る。（なお，農耕社会よりは牧畜を主とする場合の方が，交換への指向が高いであろうという指摘や，純粋に転売のみをおこなう商人も，その中間で加工して転売する者，すなわち製造業者も，本質的には同一性格の者と看做し得るという指摘もなされている。）

新たに生れた大小の商人が，その数を増してくると，ここに彼等自身の組織が必要となる。そして，それは，これまでの組織とは性格を異にするものである。商人の組織は，誰かによって指揮統率されるというタイプのものではあり得ないが，彼等が円滑に活動を続けるためには，何らかの秩序が必要である。単に市場（取引の場所としての）における秩序の必要というだけでなく，とくに大切なのは財産および契約の保護の必要である。しかし，かかる保護（法的保護）は，非市場経済組織の法制によっては与えられない。それは商人達自身が，政治的法律的枠組をもそなえた組織を形成することによって与えられ得る。

かかる組織はいかにして形成されるか。その社会においては商業が社会的にも重要な位置をしめ（したがって外部との商業がおこなわれている方が好都合），社会全体があまり大きくなく（小さな社会ほど外部との交易の機会は大きい），しかし，自身の必要に応じた制度を形成し得る独立性が保たれていなければならない。かかる難しい条件をそなえたものは，歴史の上でいえば，都市国家に他ならない。ヒックスによれば，世界史において，都市国家という段階を経たか否かが，ヨーロッパとアジアを区別することになった。そして，ヨーロッパが，かかる段階を経験し得た理由は，主に地中海の存在という事実にかかっている。

Customary Economy と Command Economy の周辺に生れた商人たちの経済組織をヒックスは，Mercantile Economy と名付ける。都市国家はその最初の段階である。別のいい方をすれば，これは非市場経済の中に，市場が成立した段階といってよい。Mercantile Economy の次の段階——ヒックスはこれを Middle Phase と呼ぶ——は，市場が非市場的経済組織の中へ浸透してゆく段階である。Modern Phase と呼ばれる最後の段階——これが現在の世界であるわけだが——そこにおいては市場経済が支配的となり，残存している非市場的要素を吸収してゆく。以上が，市場の成立と拡大という観点から見たヒックスの経済発展の諸段階であるが，彼は同時に，政治との関係という観点からも上記の諸段階を考察している。

すなわち，王なり首長なりといった政治的権威との関係からいえば，Mercantile Economy の最初の段階は，在来の権威からの逃走（商人達が自分達の組織をつく

る）段階である。中間段階は，それが伝統的権威の支配下に復帰してゆくが，首長なり政府なりの側からすると，市場をコントロールするような力は持たぬ段階である。しかし，最後の Modern Phase に至ると，市場内部における進化（とくに財政金融制度の整備）と行政面での進化——ヒックスはそれを Administrative Revolution と呼ぶ——により，政治的権威は市場経済をコントロールする力を持つことになる。これは政治体制の如何を問わず，施政者の目的にかかわらずいえることである。

話を都市国家の段階に戻すと，ここでは外部と取引する専業化した商人達が中心である。外部というのは，とくに非市場的経済組織を意味する。かかる取引は，自発的になされるかぎり，商人ばかりでなく，外部の人々にとっても利益をもたらす。(何らかの利益がもたらされぬかぎり，取引に加わるはずがないからである。)すなわち，交易の発達，もしくは市場の拡大は，それに関与する人々の福祉を，全般的に見れば，増進する傾向を有するのであって，市場経済の発展と福祉の増進というテーマが，ヒックスの理論のもう一つの柱になっている。全般的に見れば，といったのは，当然，分配問題であるとか，都市国家による植民地建設過程で生ずる原住民の放逐といった問題が存在するからである。

ところで，市場経済の発展は，都市国家の発達がそのまま中間段階に連続するというようなスムースな形で進行するわけではない。都市国家の発展は内的要因からも停滞し得るし，とくに外的事情から断ち切られることがある。すなわち都市国家との交易により豊かになった外部の国が強力になり，都市国家を征服するという場合である。外部の国は，元来，非市場経済であるが，都市国家との接触の結果，市場の浸透に対する壁は，ほぼ崩壊している。そして，この市場経済の浸透過程が，すなわち Middle Phase となるわけである。この過程は本書では，(1)貨幣・法律・信用，(2)国家財政，(3)農業の商業化，(4)労働市場，というトピックに分けて考察されている。このうち，(1)と(2)は，いわば市場経済の浸透が比較的，抵抗なく進行し得た分野であって，信用制度，とくに銀行の発達が大きな役割を果した。銀行を媒介としての信用の環の拡大と，銀行の信用創造を媒介としての国家の財政能力の強化（これが前記の Modern Phase につながる）が，その内容をなす。

しかし，(3)と(4)の分野，土地と労働，あるいは農業と工業ということになると，市場経済の浸透は容易ではない。市場という組織は本来が商人(そして金融業者)のものであって，農民や手工業者のものではないからである。まず農業について，ヒックスは，非市場的組織として Lord and Peasant System というものを考え，それが市場の浸透の結果，地主小作制，自由農民制，賃労働者を使用した大農制，あるいは東ヨーロッパ的な農奴制へと変化してゆく過程を考察する。かかる様々な制度を生みだした要因として，商業化過程における労働の相対的稀少性を，ヒックスは重視している。次に労働（とくに，他人のために働くという意味での労働）の分野では，それが交易の対象となる形態として，奴隷制と賃労働を考え，後者が支配的になる理由を，コストの低廉さに見出している。

市場経済の拡大が，福祉の増進につながると前に記したが，労働者の場合はどうか。それが「産業革命」の中心問題でもある。ヒックスの定義によれば，産業革命とは，生産に用いられる固定資本財の範囲及び種類の著るしい増加に他ならない。商人の資本は主に流動資本であるが，それにかわって固定資本が優位をしめるに至った理由は，金融制度の整備によって資本獲得が容易になったことと，技術的には，機械をつくる機械の出現が固定資本財を安価ならしめたからである。さて，産業革命が長期的に見れば労働者の生活水準を上昇せしめたことは疑い得ない。しかし，産業革命と労働者の実質賃金の上昇とは同時におこったのではなく，後者はずっとおくれた。このズレが何故生じたのかを，ヒックスは，固定資本財への投資機会増加が労働への需要にどう影響するか，という観点から解明する。さらに重要なことは，労働者の雇用に規則性が生じたことであり，それによる利益は極めて大きい。産業革命前の労働者は，いわば根無し草の無産者にすぎなかったが，今や労働者はあるまとまりを持つグループの一員となったのである。

さて，市場経済の浸透がここまで進行すると，Mercantile Economy は Modern Phase に入ったといってよい。いわゆる先進国においては，すでに市場が支配的になっており，問題は主に後進国において残っている非市場的要素の吸収ということになる。しかし，そこには当然，政治的な壁が存在しているわけである。ヒックスの『経済史の理論』は，かかる障害を指摘して閉じられる。

ヒックスの理論は，経済成長論や経済発展論が生みだしたような経済発展の理論に比較して，ずっと奥行も深く幅も広い。また最近流行の，一見理論的に見える「新しい経済史」とも無縁である。彼の理論は，伝統的な経済史学——とくにイギリスにおけるそれ——が次第に醸成してきた歴史に対する考え方を，理論家の立場からまとめてみたものと解釈することができる。最初に紹介したように，ヒックスの理論は，マルクスや歴史学派のそれに比べて，less deterministic, less evolutionary である。この点が，ヒックスの理論の長所であると共に，一種の物足りなさを感じさせる原因であろう。

世界史を，キリスト教史観の如く，あるいはマルクス史観の如く，いわば特定の目標に向って進むものと考えるならば，歴史の理論は極めて明快なものになり得る。しかし，イギリス経済史学が否定したのは，18世紀の啓蒙思想につらなるヴィクトリア朝風の「進歩主義」の史観であった。このことは，ポスタンの有名な論文「貨幣経済の勃興」を見ても明らかである。ところで，視野を特定問題に限れば，「イギリス中産階級は，中世初期において，中世後期におけるよりも一層資本主義的であった」といった記述も気にならないが，それが一般的理論となると，いささか歯切れが悪くなる。ヒックスのいう Mercantile Economy の最初の段階は，歴史上ではギリシャの都市国家，イタリーの自由都市，さらには17世紀のオランダ，そしてイギリスが該当することになるが，こうなると，古代から中世へ，中世から近世へという世界史の流れを，一貫した過程として説明する理論とはいい難い。ここに，前述した一種の物足りなさの生ずる所以がある。

とはいえ，この書物は極めて貴重な業績である。最近では，歴史の理論といったものは哲学的にしか取り上げられず，哲学者は経済史などに興味を示さない。そして経済史家は，教授就任講演という類の特別の機会以外，理論について論じないからである。もっとも，これは経済史家が怠慢だからではない。ピレンヌにとっては『マホメットとシャールマーニュ』が，ブロックにとっては『フランス農村史の基本性格』が，彼等の「経済史の理論」に他ならぬからである。ヒックスの書物は，彼にとってのみ可能であった。それにしても，ポスタンが第二次大戦後のヨーロッパ経済史を書き，ヒックスが経済史の理論を書くのを見るとき，われわれは，専門家を軽蔑し，アマチュアリズムを重んずるというイギリスの伝統を感ぜざるを得ない。リカードは経済学から経済史を追放したが，畢竟するに彼も亦アマチュアであった。

岡　田　泰　男